

令和4年度病害虫発生予報第8号

令和4年9月7日
鳥取県病害虫防除所

予報の概要

区分	農作物名	病害虫名	発生時期	予想発生量
普通作物	ダイズ	ハスモンヨトウ	—	平年並
果樹	ナシ	黒斑病	—	平年並
		黒星病	—	平年並
		クワコナカイガラムシ	平年並	平年並
		シンクイムシ類	—	平年並～ やや多い
		ハダニ類	—	やや多い
果樹	カキ	炭疽病	平年並	やや多い
	ブドウ	べと病	—	平年並
		チャノキイロアザミウマ ハマキムシ類 (チャノコカクモンハマキ)	— 平年並	平年並
		共通(ナシ、カキ、 ブドウ、リンゴ)	カメムシ類	—
野菜	ネギ	軟腐病	平年並	やや多い
		白絹病	平年並	やや多い
		黒斑病	—	やや多い
		ネギハモグリバエ	—	やや少ない
		ネギアザミウマ	—	やや多い
	ネギ、ナガイモ	シロイチモジヨトウ	—	やや多い
	ナガイモ	炭疽病	—	やや多い
		ナガイモコガ	—	平年並
		ハダニ類	—	平年並
	キャベツ、 ブロッコリー	べと病	平年並	やや少ない
黒腐病		平年並	やや多い	
軟腐病		平年並	やや多い	
黒すす病		平年並	やや多い	
アブラムシ類		平年並	平年並	
コナガ ヨトウムシ		平年並 平年並	平年並 平年並	
キャベツ、 ブロッコリー、イチゴ	ハスモンヨトウ	—	平年並	

気象予報（抜粋）

1 か月予報（9月3日～10月2日：9月1日、広島地方気象台発表）

向こう1か月の出現の可能性が最も大きい天候と、特徴のある気温、降水量等の確率は以下のとおりです。

天気は数日の周期で変わりますが、平年に比べ晴れの日が少ないでしょう。

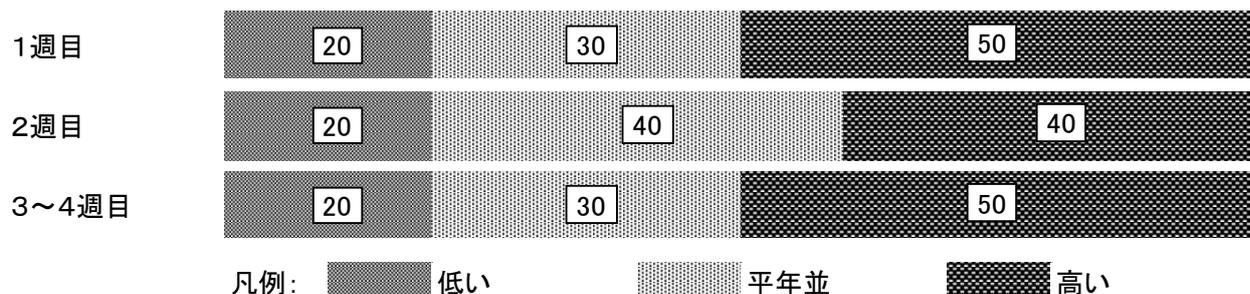
向こう1か月の平均気温は、高い確率50%です。降水量は、平年並または高い確率ともに40%です。

週別の気温は、1週目は、高い確率50%です。2週目は、平年並または高い確率ともに40%です。3～4週目は、高い確率50%です。

<向こう1か月の気温、降水量の各階級の確率(%)>



<気温経過の各階級の確率(%)>



普通作物

[ダイズ]

1 ハスモンヨトウ

(1) 予報の内容

発生地域 県内全域

発生量 平年並

(2) 予報の根拠

ア 8月第6半旬現在、フェロモントラップによる誘殺数は平年並である。

イ これまでのダイズの生育状況、本種の発生状況及び向こう1か月の気象予報から、発生量は平年並と予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 中齢～老齢幼虫が混在する場合は、ジアミド系殺虫剤を散布する。

イ 防除の目安は、1a当たりの白変葉か所数5か所以上とする。なお、白変葉の確認にあたっては、ほ場周辺からの観察のみならず、ほ場内でも観察を行う。

果 樹

[ナ シ]

1 黒斑病

(1) 予報の内容

発生量 平年並

(2) 予報の根拠

ア 8月下旬現在、県予察ほ場（園芸試験場）の新梢葉における発生量は平年並である。

イ これまでの発生経過及び向こう1か月の気象予報から、発生量は平年並と予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 新梢葉の発病増加と花芽への感染を防ぐため、収穫終了後の薬剤散布を徹底する。

イ 薬剤は、収穫終了後にアントラコール顆粒水和剤500倍液などを散布する。特に、現在、新梢葉の発病が多い園では、収穫後の薬剤散布を徹底し、病原菌の感染を防ぐ。

ウ 越冬菌密度を下げるため、落葉後（11～12月）の落葉処分を励行する。

2 黒星病

(1) 予報の内容

発生量 平年並

(2) 予報の根拠

ア 9月上旬現在、現地ほ場における収穫果被害は前年に比べて少ない。

イ これまでの発生経過及び向こう1か月の気象予報から、発生量は平年並と予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 秋期の発病は越冬菌密度の増加につながるので、収穫終了後の薬剤散布を実施する。

イ 収穫終了後にアントラコール顆粒水和剤500倍液又はポリベリン水和剤1,500倍液などを散布する。

ウ 秋季防除として、‘新甘泉’では10月上旬頃にチウラム水和剤（トレノックフロアブル又はチオノックフロアブル）500倍液、10月中旬頃にオキシラン水和剤600倍液を散布し、多発園では11月上旬～下旬頃に1～2回の追加散布を行う。追加散布薬剤は、デランフロアブル1,000倍液、アントラコール顆粒水和剤500倍液などがある。なお、その他の品種は各地域の防除暦を参考とする。

エ 異なる品種の混植園などで薬剤散布を行う場合は、薬剤の使用基準（収穫前日数、散布回数など）に注意する。

オ 越冬菌密度を下げるため、落葉後（11～12月）の落葉処分を実施する。

3 クワコナカイガラムシ

(1) 予報の内容

発生時期 平年並

発生量 平年並

(2) 予報の根拠

ア クワコナカイガラムシ越冬世代のふ化開始は平年並の5月2日（平年：5月2日）、ふ化最盛期は平年並の5月7日（平年：5月8日）であった。

イ 8月下旬現在、県予察ほ場（園芸試験場、慣行防除体系）におけるクワコナカイガラムシの被害果率は0%（平年：0%）と平年並である。

ウ これまでの気象経過及び向こう1か月の気象予報から、第2世代の幼虫のふ化時期は、平年並の8月中旬～8月下旬頃、発生量は平年並と予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 秋期に本種の発生が認められる園では、越冬量が増加し、翌年に多発する可能性が高いことから、収穫後の防除を徹底する。

イ 多発園では、収穫終了後にダイアジノン水和剤34の1，000倍液などを散布する。

4 シンクイムシ類

(1) 予報の内容

発生量 平年並～やや多い

(2) 予報の根拠

ア 8月下旬現在、現地9地点のフェロモントラップにおけるシンクイムシ類の誘殺数は、ナシヒメシンクイは平年に比べてやや多く、モモシンクイガは平年並となっている。

イ 8月下旬現在、県予察ほ場（園芸試験場、ナシ‘ゴールド二十世紀’、無袋・殺虫剤無散布）におけるシンクイムシ類の果実被害は平年に比べてやや多い。

ウ これまでの発生経過及び向こう1か月の気象予報から、発生量は平年並～やや多いと予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 現在、シンクイムシ類の発生盛期であるため、晩生品種（‘新高’、‘新興’、‘王秋’など）では防除を徹底する。

イ 薬剤は、シペルメトリン水和剤（アグロスリン水和剤2，000倍液又はイカズチWDG1，500倍液）、テルスターフロアブル3，000倍液、サムコルフロアブル10の5，000倍液、フェニックスフロアブル4，000倍液などを散布する。

5 ハダニ類（カンザワハダニ，クワオオハダニ，ナミハダニ）

(1) 予報の内容

発生量 やや多い

(2) 予報の根拠

ア 8月下旬現在、県予察ほ場（園芸試験場、慣行防除体系）におけるカンザワハダニの10葉当たりの寄生個体数は0.2頭（平年：0.8頭）と平年並である。

イ 向こう1か月の気象予報は、ハダニ類の発生にやや好適な条件であり、発生量は平年に比べてやや多いと予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

発生密度が高い園では、越冬密度を低減させるため、秋期の対策（薬剤散布、紙バンド巻きなど）を徹底する。

[カ キ]

1 炭疽病

(1) 予報の内容

発生時期 平年並
発生量 やや多い

(2) 予報の根拠

- ア 9月上旬現在、一部の現地ほ場において本病の発生が認められている。
- イ これまでの発生経過及び向こう1か月の気象予報から、発生時期は平年並、発生量はやや多いと予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

- ア 9月にストライド顆粒水和剤3,000倍液、ナリアWDG2,000倍液などを散布する。
- イ 長雨で散布間隔が長くなると発病が増加するため、定期防除を徹底し、降雨前の防除を心がける。
- ウ 発病が認められた新梢や果実は直ちに切除して、園外に持ち出し処分する。
- エ 枝病斑を探す際は、主枝や亜主枝から発生した新梢や二次伸長している枝を中心に観察する。

[ブドウ]

1 ベと病

(1) 予報の内容

発生量 平年並

(2) 予報の根拠

- ア 9月上旬現在、一部の現地ほ場において本病の発生が認められている。
- イ 向こう1か月の気象予報から、発生量は平年並と予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

- ア 秋期の発病は早期落葉と越冬菌密度の増加につながるもので、収穫終了後の薬剤散布を1～2回行う。
- イ 薬剤は、収穫終了後にムッシュボルドーDF500倍液などを散布する。なお、無加温ハウス栽培でのビニール除去後及び露地栽培では、散布時に固着性展着剤を加用する。

2 チャノキイロアザミウマ

(1) 予報の内容

発生量 平年並

(2) 予報の根拠

- ア 9月上旬現在、県予察ほ場（砂丘地農業研究センター）の黄色粘着トラップにおける本種の誘殺数は、平年に比べてやや少ない。
- イ 9月上旬現在、現地ほ場における本種による果実被害の発生量は平年並となっている。
- ウ 向こう1か月の気象予報から、発生量は平年並と予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

- ア 多発園では、収穫終了後にコテツフロアブル3,000倍液などを散布する。
- イ 9月に発生量が増加すると越冬量が多くなり、翌年の発生源となるため、多発園では防除を徹底する。

3 ハマキムシ類（チャノコカクモンハマキ）

（1）予報の内容

発生時期 平年並

発生量 平年並

（2）予報の根拠

ア 8月下旬現在、県予察ほ場（砂丘地農業研究センター）のフェロモントラップにおける本種の誘殺数は、平年並となっている。

イ 9月上旬現在、現地ほ場における本種による果実被害の発生量は平年並となっている。

ウ これまでの発生経過及び向こう1か月の気象予報から、次世代成虫の発生ピークは平年並の9月下旬頃、発生量は平年並と予想される。

（3）防除上注意すべき事項

ア 近年、秋期の気温が高めに推移し、9月以降多発生となるほ場が認められる。秋期の発生は越冬密度を高め、翌年春の発生量の増加を招くため、収穫後であっても注意してほ場を観察する。

イ 多発園では、収穫終了後にフェニックスフロアブル4，000倍液、サイアノックス水和剤1，000倍液などを追加散布する。

[果樹共通（ナシ、カキ、ブドウ、リンゴ）]

1 カメムシ類（令和4年6月27日付で病虫害発生予察注意報第3号を発表）

（1）予報の内容

発生量 やや多い

（2）予報の根拠

ア 8月下旬現在、予察灯におけるカメムシ類の誘殺数は、平年並となっている。また集合フェロモントラップのカメムシ類の誘殺数は、一部地点で平年に比べてやや多い～多い。

イ 8月下旬現在、県予察ほ場（園芸試験場、ナシ‘ゴールド二十世紀’、無袋・殺虫剤無散布）において、カメムシ類の果実被害がわずかに確認されている。

ウ 8月第6半旬現在、園芸試験場の防風樹であるサンゴジュにおけるカメムシ類の100果そう当たりの寄生数は3.0頭（平年：0.8頭）と、平年に比べてやや多い。

エ 県予察ほ場（園芸試験場河原試験地）において、カキの果実被害が確認されている。

オ 向こう1か月の気象予報は、カメムシ類の加害活動に好適な条件であり、発生量はやや多いと予想される。

（3）防除上注意すべき事項

ア 被害や飛来状況は、ほ場間差が大きいいため、園内外をこまめに見回り早期発見に努め、被害果実やカメムシ類の発生が多い場合は早急に防除を行う。

イ 防除のタイミングは、カメムシ類が飛来する夕方か早朝が効果的である。また、移動性が高いため、広域的な防除に努める。

ウ 各樹種の防除薬剤は表を参考とする。また、農薬の使用基準を遵守するとともに、使用上の注意事項を守る。

表 果樹カメムシ類の主な防除薬剤と使用基準*

作物名	農薬の名称	希釈 倍数	使用時期	本剤の 使用回数	IRAC コード**	薬剤の系統
なし	ジノテフラン水溶剤 (アルバリン顆粒水溶剤 又はスタークル顆粒水溶剤)	2,000 倍	収穫前日 まで	3 回以内	4 A	ネニコチノイド系
	アクタラ顆粒水溶剤	2,000 倍	収穫前日 まで	3 回以内		
	シペルメトリン水和剤 (アグロスリン水和剤)	1,000 倍～ 2,000 倍	収穫前日 まで	3 回以内	3 A	合成ピレスロイ ド系
	シペルメトリン水和剤 (イカズチWDG)	1,500 倍	収穫前日 まで			
	テルスターフロアブル	3,000 倍～ 6,000 倍	収穫前日 まで	2 回以内		
かき	ジノテフラン水溶剤 (アルバリン顆粒水溶剤 又はスタークル顆粒水溶剤)	2,000 倍	収穫前日 まで	3 回以内	4 A	ネニコチノイド系
	アクタラ顆粒水溶剤	2,000 倍	収穫 3 日前 まで	3 回以内		
ぶどう	ジノテフラン水溶剤 (アルバリン顆粒水溶剤 又はスタークル顆粒水溶剤)	2,000 倍	収穫前日 まで	3 回以内	4 A	ネニコチノイド系
りんご	ジノテフラン水溶剤 (アルバリン顆粒水溶剤 又はスタークル顆粒水溶剤)	2,000 倍	収穫前日 まで	3 回以内	4 A	ネニコチノイド系

*農薬の登録内容は令和 4 年度 8 月末現在

**IRAC コードは殺虫剤の作用機構の分類を示す。

野 菜

[ネギ]

1 軟腐病

(1) 予報の内容

発生時期 平年並
発生量 やや多い

(2) 予報の根拠

ア 7 月下旬現在、現地調査ほ場において、本病の発生量はやや多い。

イ 本病は高温多湿で発病が助長される。

ウ 向こう 1 か月の気象予報から、発生時期は平年並、発生量はやや多いと予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

ア ネギに傷がつくような無理な土寄せや追肥を行うと発病が助長されるので避ける。

イ ナレート水和剤 1,000 倍液、スターナ水和剤 2,000 倍、ヨネポン水和剤 500 倍、コサイド DF 1,000 倍液、Z ボルドー 500 倍液、クプロシールド 1,000 倍液などを 7～10 日間隔で 2～3 回散布する。

2 白絹病

(1) 予報の内容

発生時期 平年並

発生量 やや多い

(2) 予報の根拠

ア 7月下旬現在、現地調査ほ場において、本病の発生量は平年並である。

イ 本病は高温多湿で発病が助長される。

ウ 向こう1か月の気象予報から、発生時期は平年並、発生量はやや多いと予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

8月に発病がみられる場合は、モンカットフロアブル40の2,000倍液、カナメフロアブル4,000倍液、ジオゼット水和剤500倍液などを使用する。

3 黒斑病

(1) 予報の内容

発生量 やや多い

(2) 予報の根拠

ア 8月下旬現在、現地調査ほ場における本病の発生量は平年並である。

イ 本病は平均気温25℃前後が発病適温であり、降雨が多い場合に多発する。

ウ 向こう1か月の気象予報から、発生量はやや多いと予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 根傷み、肥料不足によって発病が助長されるので、肥培管理に注意する。

イ 薬剤は、マンゼブ水和剤（ジマンダイセン水和剤、ペンコゼブフロアブルなど）600倍液、ポリベリン水和剤1,500倍液などを発病初期から散布する。発病が増加する場合は、ロブラール水和剤1,000倍液、ファンタジスタ顆粒水和剤3,000倍液、シグナムWDG1,500倍液などを散布する。

4 ネギハモグリバエ

(1) 予報の内容

発生量 やや少ない

(2) 予報の根拠

ア 8月下旬現在、現地調査ほ場における発生量はやや少ない。

イ 向こう1か月の気象予報から、発生量はやや少ないと予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 本種は別系統の発生を確認している（令和元年2月19日付で、病害虫発生予察特殊報第2号を発表）。

イ 土寄せ時にはベストガード粒剤6kg/10aの株元処理を行う。

ウ 散布剤はアグロスリン乳剤2,000倍液、ディアナSC2,500～5,000倍液、ファインセーブフロアブル2,000倍液、グレーシア乳剤2,000～3,000倍液、ヨーバルフロアブル2,500～5,000倍液などを散布する。

5 ネギアザミウマ

(1) 予報の内容

発生量 やや多い

(2) 予報の根拠

ア 8月下旬現在、現地調査ほ場における発生量はやや多い。

イ 向こう1か月の気象予報から、発生量はやや多いと予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

- ア 土寄せ時にはベストガード粒剤 6 k g / 1 0 a 株元処理、ダントツ粒剤 3 ~ 6 k g / 1 0 a 株元処理などを行う。
- イ 散布剤はウララDF 1, 0 0 0 ~ 2 0 0 0 倍液、ハチハチ乳剤 1, 0 0 0 倍液、ディアナSC 2, 5 0 0 ~ 5, 0 0 0 倍液、ベネビアOD 2, 0 0 0 倍液、ファインセーブフロアブル 1, 0 0 0 ~ 2, 0 0 0 倍液、グレーシア乳剤 2, 0 0 0 ~ 3, 0 0 0 倍液などを 7 ~ 1 0 日間隔で散布する。

[ネギ、ナガイモ]

1 シロイチモジヨトウ

(1) 予報の内容

発生量 やや多い

(2) 予報の根拠

ア 8月下旬現在、県予察ほ場（園芸試験場）に設置したフェロモントラップによる誘殺数は平年並である。

イ 8月下旬現在、現地調査ほ場において発生量はやや多い。

ウ 向こう1か月の気象予報から、発生量はやや多いと予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 薬剤の感受性が高い若齢期に防除を行う。ほ場内をよく観察し、発生がみられる場合には直ちに防除を行う。

イ ネギの薬剤は、トルネードエースDF 1, 0 0 0 倍液、スピノエース顆粒水和剤 5, 0 0 0 倍液、ディアナSC 2, 5 0 0 ~ 5, 0 0 0 倍液、グレーシア乳剤 2, 0 0 0 ~ 3, 0 0 0 倍液、ヨーバルフロアブル 2, 5 0 0 ~ 5, 0 0 0 倍液などを散布する。

ウ ナガイモの薬剤は、デルフィン顆粒水和剤 1, 0 0 0 倍液を散布する。

[ナガイモ]

1 炭疽病

(1) 予報の内容

発生量 やや多い

(2) 予報の根拠

ア 8月下旬現在、県予察ほ場（園芸試験場）における本病の発生量は平年並である。

イ 向こう1か月の気象予報から発生量はやや多いと予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 肥料切れしないように適度な追肥を行う。

イ 茎葉の繁茂により薬液が葉裏にかかりにくいので、薬剤散布は丁寧に行う。

ウ 大雨や台風の直後には、天候回復後にできるだけ早く薬剤散布する。

エ 薬剤は、ダコニール 1 0 0 0 の 1, 0 0 0 倍液、ジマンダイセン水和剤 4 0 0 ~ 6 0 0 倍液、アミスター 2 0 フロアブル 2, 0 0 0 倍液などを散布する。

2 ナガイモコガ

(1) 予報の内容

発生量 平年並

(2) 予報の根拠

- ア 8月下旬現在、県予察ほ場（園芸試験場）に設置したフェロモントラップによる誘殺数は、平年並である。
- イ 8月下旬現在、県予察ほ場（園芸試験場）において、発生は認められていない。
- ウ 向こう1か月の気象予報から、発生量は平年並と予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

- ア 薬剤は、アタブロン乳剤2，000倍液、トレボン乳剤1，000倍液、モスピラン顆粒水溶剤4，000倍液、プレバソフロアブル5の2，000倍液などを7～10日間隔で2回程度散布する。
- イ 茎葉の繁茂により薬液が葉裏にかかりにくいので、薬剤散布は丁寧に行う。

3 ハダニ類

(1) 予報の内容

発生量 平年並

(2) 予報の根拠

- ア 8月下旬現在、県予察ほ場（園芸試験場）における発生は認められていない。
- イ 向こう1か月の気象予報から、発生量は平年並と予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

薬剤は、ハダニ類を対象にコロマイト乳剤1，000倍液など、カンザワハダニを対象にコテツフロアブル2，000倍液を葉裏にも付着するように丁寧に散布する。

[キャベツ、ブロッコリー]

1 ベと病

(1) 予報の内容

発生時期 平年並
発生量 やや少ない

(2) 予報の根拠

- ア 8月下旬現在、現地調査ほ場において、本病の発生は認められていない。
- イ 本病は気温が比較的低温、降雨が多いと発生が多くなる。
- ウ 向こう1か月の気象予報から、発生時期は平年並、発生量はやや少ないと予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

- ア キャベツの薬剤は、ヨネポン水和剤500倍液、マンゼブ水和剤（ジマンダイセン水和剤、ペンコゼブフロアブルなど）500～600倍液、リドミルゴールドMZ1，000倍液、フォリオゴールド800～1，000倍、シグナムWDG1，500～2，000倍液、レーバスフロアブル2，000倍液などを予防散布する。
- イ ブロッコリーの薬剤は、フォリオゴールド1，000倍液、レーバスフロアブル2，000倍液、シグナムWDG1，500倍液、メジャーフロアブル2，000倍液などを予防散布する。なお、フォリオゴールドは花蕾形成前までに散布する。

2 黒腐病

(1) 予報の内容

発生時期 平年並
発生量 やや多い

(2) 予報の根拠

- ア 8月下旬現在、現地調査ほ場における本病の発生量は平年並である。
- イ 本病は、降雨が多い場合や、台風に伴う風雨によって発病が助長されやすい。
- ウ 向こう1か月の気象予報から、発生時期は平年並、発生量はやや多いと予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

- ア 害虫の食害痕も病原菌の侵入口となるため、害虫防除を徹底する。
- イ 肥料不足になると多発しやすいため、肥料切れしないよう注意する。
- ウ 発生前の予防防除を行う。特に大雨や台風の直後には、天候の回復を待つことができるだけ早く薬剤散布する。
- エ キャベツの薬剤は、カスガマイシン・銅水和剤（カスミンボルドー又は銅パーシン水和剤）1, 000倍液、有機銅水和剤（キノンドー水和剤40の500～800倍液又はドキリンフロアブル500～1, 000倍液など）、ヨネポン水和剤500倍液、Zボルドー500倍液などを散布する。
- オ ブロッコリーの薬剤は、カスガマイシン・銅水和剤（カスミンボルドー又は銅パーシン水和剤）1, 000倍液、キノンドー水和剤40の800倍液、ヨネポン水和剤500倍液、Zボルドー500倍液などを散布する。

3 軟腐病

(1) 予報の内容

発生時期	平年並
発生量	やや多い

(2) 予報の根拠

- ア 8月下旬現在、現地調査ほ場において、本病の発生は認められていない。
- イ 本病は、気温が高く、降雨が多いと発生が多くなる。また、台風に伴う風雨によっても発病が助長されやすい。
- ウ 向こう1か月の気象予報から、発生時期は平年並、発生量はやや多いと予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

- ア 害虫の食害痕も病原菌の侵入口となるため、害虫防除を徹底する。
- イ 発生前の予防防除を行う。特に大雨や台風の直後には、天候の回復を待つことができるだけ早く薬剤を散布する。
- ウ キャベツの薬剤は、カスガマイシン・銅水和剤（カスミンボルドー又は銅パーシン水和剤）1, 000倍液、ドキリンフロアブル800～1, 000倍液、ヨネポン水和剤500倍液、Zボルドー500倍液などを散布する。
- エ ブロッコリーの薬剤は、ナレート水和剤1, 000倍液、Zボルドー500倍液、クプロシールドの1, 000～1, 500倍液などを散布する。

4 黒すす病

(1) 予報の内容

発生時期	平年並
発生量	やや多い

(2) 予報の根拠

- ア 8月下旬現在、現地調査ほ場において本病の発生は認められていない。
- イ 本病は、気温25℃付近が発病適温であり、多湿条件下で発生が多くなる。また、降雨と強風により発生が多くなるため、台風に伴う風雨によって発病が助長されやすい。
- ウ 向こう1か月の気象予報から、発生時期は平年並、発生量はやや多いと予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 発生前の予防防除を行う。特に大雨や台風の直後には、天候の回復を待つてできるだけ早く薬剤散布する。

イ ブロココリーの薬剤は、シグナムWDG 1,500倍液、アフェットフロアブル2,000倍液、アミスター20フロアブル2,000倍液、パレード20フロアブル2,000～4,000倍液、メジャーフロアブル2,000倍液などを散布する。

5 アブラムシ類

(1) 予報の内容

発生時期 平年並

発生量 平年並

(2) 予報の根拠

ア 8月下旬現在、現地調査ほ場における発生は認められていない。

イ 向こう1か月の気象予報から、発生時期、発生量ともに平年並と予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 苗の育苗期後半～定植当日には、ジュリボフロアブル200倍液、ベリマークSC400倍液などをセルトレイ灌注する。また、定植前日～定植時には、キックオフ顆粒水和剤100倍液をセルトレイ灌注する。

イ 本圃での発生時には、アクタラ顆粒水溶剤3,000倍液、コルト顆粒水和剤4,000倍液、ウララDF2,000～3,000倍液、トランスフォームフロアブル2,000倍液などを散布する。

6 コナガ

(1) 予報の内容

発生時期 平年並

発生量 平年並

(2) 予報の根拠

ア 8月下旬現在、県予察ほ場（園芸試験場）に設置したフェロモントラップによる誘殺数は平年並である。

イ 8月下旬現在、現地調査ほ場における発生量は平年並である。

ウ 向こう1か月の気象予報から、発生時期、発生量ともに平年並と予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 苗の育苗期後半～定植当日には、プレバソンフロアブル5の100倍液、ジュリボフロアブル200倍液、ベリマークSC400倍液などをセルトレイ灌注する。また、定植前日～定植時には、キックオフ顆粒水和剤100倍液をセルトレイ灌注する。

イ 本圃での発生時には、トルネードエースDF2,000倍液、ディアナSC2,500～5,000倍液、アニキ乳剤1,000～2,000倍液、グレースシア乳剤2,000～3,000倍液、ブロフレアSC2,000～4,000倍液、ヨーバルフロアブルの2,500～5,000倍液などを散布する。

7 ヨトウムシ

(1) 予報の内容

発生時期 平年並

発生量 平年並

(2) 予報の根拠

ア 8月下旬現在、現地調査ほ場における発生量は平年並である。

イ 向こう1か月の気象予報から、発生時期、発生量ともに平年並と予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 薬剤の感受性が高い若齢期のうちに防除を行う。ほ場内をよく観察し、発生がみられる場合には直ちに防除を行う。

イ キャベツの薬剤は、ディアナSC2, 500～5,000倍液、トルネードエースDF2, 000倍液、ファルコンフロアブル2, 000～4,000倍液、グレースシア乳剤2, 000～3, 000倍液、カウンター乳剤2, 000～3, 000倍液などを散布する。

ウ ブロッコリーの薬剤は、ディアナSC2, 500～5,000倍液、マトリックフロアブル1, 000～2, 000倍液、ランネート45DF1, 000倍液、ファルコンフロアブル4, 000倍液、グレースシア乳剤2, 000～3, 000倍液、プロフレアSC2, 000～4, 000倍などを散布する。

[キャベツ、ブロッコリー、イチゴ]

1 ハスモンヨトウ

(1) 予報の内容

発生量 平年並

(2) 予報の根拠

ア 8月下旬現在、県予察ほ場（園芸試験場）に設置したフェロモントラップによる誘殺数はやや少ない。

イ 現地調査ほ場における発生量は平年並である。

ウ 向こう1か月の気象予報から、発生量は平年並と予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 薬剤の感受性が高い若齢期のうちに防除を行う。ほ場内をよく観察し、発生がみられる場合には直ちに防除を行う。

イ キャベツでは、ディアナSC2, 500～5,000倍液、アニキ乳剤1, 000～2, 000倍液、プレオフロアブル1, 000倍液、トルネードエースDF2, 000倍液、マトリックフロアブル2, 000倍液、ファルコンフロアブル2, 000～4, 000倍液、グレースシア乳剤2, 000～3, 000倍液、カウンター乳剤2, 000～3, 000倍液などを散布する。

ウ ブロッコリーでは、ディアナSC2, 500～5,000倍液、アニキ乳剤1, 000～2, 000倍液、プレオフロアブル1, 000倍液、ファルコンフロアブル4, 000倍液、グレースシア乳剤2, 000倍液、プロフレアSC2, 000～4, 000倍、ヨーバルフロアブル2, 500～5, 000倍などを散布する。

エ イチゴでは、マッチ乳剤3, 000倍液、フェニックス顆粒水和剤2, 000～4, 000倍液、トルネードエースDF2, 000倍液、グレースシア乳剤2, 000倍液などを散布する。

[おしらせ]

農薬の使用に当たっては、農薬使用基準を遵守するとともに、周辺への飛散には十分注意しましょう。

農薬の詳しい登録内容は、独立行政法人 農林水産消費安全技術センターの「農薬登録情報検索システム」から検索できます (<https://pesticide.maff.go.jp/>)。

なお、農薬の使用や防除指導等に際しては、農薬のラベルを必ず御確認ください。

<鳥取県病虫害防除所ホームページ>

アドレス <http://www.jpnpn.ne.jp/tottori/>



ホームページ2次元コード

病虫害発生予察情報、フェロモントラップ調査結果（ナシのシンクイムシ類ほか）などの参考情報、病虫害の診断方法などの情報をお知らせしていますので、御利用ください。

<お問い合わせ>

普通作物関係：〒680-1142 鳥取市橋本 260
鳥取県病虫害防除所
(TEL：0857-53-1345、E-mail：boujyot@titan.ocn.ne.jp)
もしくは
鳥取県農業試験場環境研究室
(TEL：0857-53-0721、FAX：0857-53-0723)

果樹・野菜・花き関係
〒689-2221 東伯郡北栄町由良宿 2048
鳥取県園芸試験場環境研究室
(TEL：0858-37-4211、FAX：0858-37-4822)

※予報第9号の発表は、10月5日（水）の予定です。

なお、予定日と実際の発表日が前後することがありますので、御注意ください。